

過去に学び未来をつくる「思考の旅」へ

山崎 友子

春が来た。桜木は見事な花を咲かせ、山には山菜が息吹く。しかし、心はいつもとは違い、冬の気配のままである。欧州の東端にあるウクライナにおいて、人々は砲弾に追われて潜む地下室で恐怖に慄き、五百万人を超える人々は国境を越えて避難し大きな不安の中にある。突然命を奪われた人々の数は正確に把握できない。TVでは、様々な「兵器」の「支援」が報じられる。東日本大震災では、発生から1年後の3月11日の新聞紙上に犠牲となられた方々の氏名が数頁にわたって掲載された。お名前の一つ一つに突然失われた人生の無念・悲しみ・重さがあることを想像させられた。被災地では一人の命の重さが現実に取り、命が災害により失われることを何としても防がなければとの思いが広がった。しかし今、ウクライナの市民や兵士の失われた命、失われようとする命のなんと儚く、夥しい数であろうか。様々な災害体験から得られた人の生に対する尊厳への強い思いは、どこにいつてしまったのであろうか。

中国研究家の遠藤誉氏は、中国長春で迎えた第二次世界大戦の終戦の混乱の中日本へ引き揚げてきた方である。氏はウクライナへのロシアの侵攻の報道に接し、74年前の「長春食料封鎖」により餓死が広がった情景が蘇り、体の震えが止まらない、心的外傷後ストレス障害は薬ではもとに戻せない、これに悩み葛藤した時、自分には「書く」という武器があるということに気づいた、と言う。米露の関係をもう一つの大国中国という切口から読み解き、ウクライナ侵略がなぜ起こったか、世界がどう変わっていくかを、緻密に資料と心理を読み解き、220頁を超える本にした。僅か10日での上梓とのことである。「戦争のメカニズムの真相を見極める勇気を持たなければ、人類から戦争が消えることはない」と言う戦争を実際に体験した人の訴えに、強烈な信念と勇気を感じる。この本を書くこと、読むことを、「思考の旅」と呼んでおられる。

災害は社会の課題を映し出す。異常な自然現象は繰り返し発生するものであるが、人の対応はどうであろうか。社会の課題の解決に向かい、災害に強い社会づくりが行われ、その結果日常住みやすい社会となっているであろうか。今年1月、東日本大震災後初めて「津波警報」が発令された。トンガ王国の海底火山噴火に伴い発令されたものである。新たなタイプの津波でありさらに警報への深夜の変更等々の悪条件があったとは言え、避難者が極めて少なかった。東日本大震災の教訓の再確認が必要である。人の認識は変化し、さらに自然そのものも変化し続ける。自然のメカニズムと人の対応ともに検証し続けなければならない。東日本大震災から10年を節目に次の警戒を促し、中央防災会議から日本近海での地震発生に伴う大津波の被害想定が発表されている。これらの想定をリアルなものとして受けとめ、新たな警戒の具現化に向かわせる「思考の旅」が求められている。

東日本大震災で岩手県の小中学校の学校管理下においては犠牲者がゼロであった。大きな要因の一つに、事前の備えがあった。2005年、中央防災会議からの地震・津波対策に関する調査報告の公表を受けて、教育現場は津波防災に取り組んでいた。宮古市教育委員会は葉養正明氏（当時国立教育政策研究所教育政策・評価研究部 部長）に助言を依頼し、様々な対策を講じていた。『災害文化研究』第6号発刊にあたり、長く三陸の教育へ目を向けてこられた葉養氏に巻頭論文の寄稿をお願いしたところご快諾いただいた。2007年に始まる縦断的な調査をもとに、被災地の復興教育を考察し子どもの学習の復興が直線的ではないこと等11年目以降の重点課題をご指摘いただいた。被災地の子ども達を思い浮かべながら、災害という楔により変化を迫られる教育をデータをもとに思考する機会をいただいたこと、深く感謝申し上げる次第である。小室祐人氏のボランティア活動の展開を参加学生の視点から分析した研究ノートは、災

害が新たな活動と視座を教育に与えてくれることを示している。山崎憲治氏は、昭和三陸大津波発生時の社会を深刻な恐慌・戦時体制の確立に向かう時代として省察し、その中で被災した子どもや支える教師の懸命な姿を地域の教育資料から分析し、地域の核となった尋常小学校に人権に基づく教育の可能性を求めた教員がいたことを明らかにしている。宮古市田老で復興に向けて NPO 活動を続ける大棒秀一氏のアンケート調査の報告からは、地域住民の依頼に応じる地域に開かれた教育行政が見えてくる。これらの論考は、東日本大震災から 11 年以降に向けて社会・教育の災害との関わりを考え、行動する契機を与えてくれるものである。その「思考の旅」にともに出かけたい。

知人から春の歌を集めた CD を作ったと 1 枚いただいた。春の歌を選ぶ中で、春そのものを謳ったものより「春を待ち望む」歌が多いことに気づいたそうである。今まさに春を待ち望む心境である。災害体験の不断の検証と新たな教訓の発見を繰り返し続ける旅が、春への一歩となることを願い、戦争という災害に苦しむ人々に一刻も早く平和という春が来ることを心より祈る。

災害文化研究会